社会科学論集　第157号　2019.3

《特集寄稿》

経済分析メジャーへの招待

宮　﨑　雅　人

1　はじめに

「経済分析メジャーへの招待」という文章を執筆するようにメジャー長から依頼されたにもかかわらず，一文字も書かずに在外研究先のシドニーにやって来てしまいました。早めに書いてしまえばよかったと後悔しつつ，夏のシドニーでパソコンに向かっています。

余計な話はさておき，メジャーへの招待という文章を書くにあたり，ここであえて「経済学とは？」「経済分析メジャーとは？」といった類の話を書かないことにします。経済学の中身については講義で説明がありますし，標準的なテキストだけでも大きな書店に行けば驚くほど置いてあります。また，メジャーについても学部案内などに書かれており，たとえばメジャーの目的は私などが説明しなくても皆さんは知ることができます。そこで，本稿では，一学生であった筆者が経済学とどのようにして出会い，向き合うようになったのという個人的な経験を，（恥を忍んで）皆さんに伝えることで，経済学にあまり興味がないという人にも少しでも経済学を身近に感じてもらい，経済分析メジャーへの招待としたいと思います。

2　「学部を間違えた」と思った１年生の頃

筆者は高校までを長野県で過ごし，大学入学ともに東京に出てきました。当時の筆者は，とにかく「田舎を出たい」という一心で受験勉強に耐え，しばらく勉強などしたくないという心境でした。さらに，正直に言えば，大学に入ってあまり勉強するつもりがなかったし，大学生になったら勉強しないものだと思っていました。「大学はレジャーランド」と言われていたことの影響だろうと思います。また，学部選びもきちんと考えた記憶がなく，もともと行きたかった大学，かつ，将来サラリーマンになるだろうからと，最終的にある大学の商学部に入ることに決めました。

その大学の商学部では，経営学，商業学，会計学に加え，経済学を応用して分析を行なっている先生方が何人もいらっしゃる領域があり，学部１年で「経済学」と「商学概論」という科目を履修することになっていました。しかし，学部をきちんと選んだわけではなかったので，当然と言えば当然ですが，この二つの科目にまったく興味が持てませんでした。「経済学」を担当されていた先生は，定年間近の大変ご高名な先生であったのですが，黒板に単語を時々思いついたように二つ三つ書くだけで，あとはゴニョゴニョと喋っているだけ。何について説明されているのか全く理解できず，経済学の第一印象は「最悪」でした。教科書を読んでも面白くなく，自分はなんでこんな学部を選んでしまったのかと激しく後悔したものでした。黒板に書かれた交わる二つの線が恨めしく思えたものです。

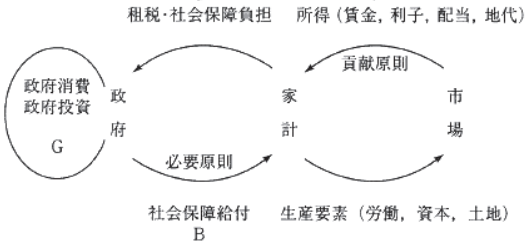
3　ゼミの先生との出会い

大学で特に学びたいこともなく，サークル活動

とアルバイトで１年生をやり過ごし，２年生になりました。「面白い講義がない」とひねくれていた中，２年次の配当の学部の経済系の先生がそれぞれを専門領域について話をするオムニバス講義を履修することにしました。たくさんの先生が講義するのだから何か一つくらい面白いのがあるのではないかと，取ってみることにしました。

その科目のうちの１回，とても興味深い講義をされる先生がいらっしゃいました。その先生は図１に示すようなものを黒板に書かれて市場・家計・政府の話をされ，さらに政策の話をされる中で，有権者が選挙に行かない理由を「投票者の合理的無知」という考え方で説明されました。合理的無知とは「野菜やくだものの値段や，パソコンの価格を調べたり，すてきなデート・スポットを探したりというような日々の生活に有益な情報を得るために費やす時間やお金（コスト）を，公共政策をしっかりと評価するために要する時間やお金に回す気にはとてもなれない」という「合理的な選択の結果としての無知」です[(1)]。後にダウンズという政治学者のアイディアであることを知ることになるのですが，先生の説明に目の前の霧が晴れたような思いがしました[(2)]。

図１　市場・家計・政府



出所　権丈（2000a），p.78.

当時の筆者は，大学の講義にはあまり興味が持てなかったのですが，政治や経済には関心があり，新聞や雑誌，テレビからそれらに関する情報を得て，あれこれ考えていました。そうした中で政治家の言動に憤りを覚えるとともに，有権者の無関心に腹を立てていました。生意気にも「政治への無関心をどうにかしなければならん」とか思っていたのですが，「合理的無知」という話を講義で聞き，「そういうことだったのか」とまさに目から鱗が落ちたようでした。こんな面白いことが商学部で学べるのかとずいぶんと嬉しくなったことを今でも覚えています。

こうしてたった１回の講義で学問への関心が湧き，大学生になって初めて「もっと勉強したい」と思うようになりました。そして，２年生の終わりのゼミ選択の際，その先生のゼミに入ることにしました。

４　少子高齢社会危機論への疑問

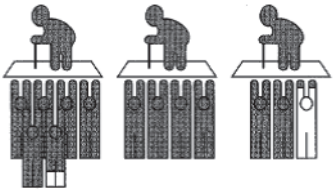
ゼミに入ってから，ようやく経済学を学ぶ自分なりの意味を見出せるようになりました。ヴァリアンの『入門ミクロ経済学』という教科書で経済学を学びましたが，先生の話を聞きながら，「１年生の頃からこういう感じであればよかったのに」と思ったものでした。大学１・２年は何をしてよいのかわからないまま苦しんでいましたが，ようやく学ぶべきものがわかったという気持ちになりました。

もしかしたら，これを読んでいる皆さんの中にも「とりあえず埼玉大学経済学部に来てみた」という人がいるかもしれません。将来のことは漠然としていてよくわからないけれど，卒業して公務員になる人が多いから，金融機関に勤める人が多いから，（特に学びたいことがあるのかわからないけれど）入ってみたと思っている人もいるでしょう。20年ほど前の私もそんな感じでした。しかし，そんな人でも，世の中の出来事に何かしらの関心があれば，「これは面白い」と思える経済学の領域が見つけられるのではないかと思います。

さて，自分の興味関心のある対象を分析する前段階の基礎的なトレーニングとして，経済学の教科書を学ぶ意味を見いだせた筆者でしたが，研究の面白さもゼミに入って知ることになります。筆者が入ったゼミは，上級生のいない新規のゼミだったので，ゼミに入ってからすぐに先生から代表に指名され，運営の相談などのために研究室にかなりの頻度で伺うようになりました。そんなあ

る日，会話の流れから筆者が習った高齢化問題の話になり，図２に示されるような内容について話をすることがありました。

図２　少子高齢化による「負担増」



出典：高校『現代社会』教科書，東京書籍（1999），p.133.

出所　権丈（2000a），p.87.

筆者「中学高校の頃，そんな図（図２：筆者注）見せられながら，『これから日本は高齢化で大変なことになる』という話を習いましたよ。」

先生「そうなのか？」

そして，数か月の後に先生によって書き上げられたのが「社会保障研究の問題設定と少子・高齢化」でした。その中で筆者と先生との会話に関係すると思われる箇所を権丈（2000）から引用します。

高齢化社会といえば，日本人は次の図（図２：筆者注）とセットにして，「現在はわが国は急ピッチで高齢化社会を迎えつつある。21 世紀の初めには人口の４人に１人は 65 歳以上の高齢者が占めると予測されている」という話を連想するように条件づけられている。中高校生の時に，こうしたことを覚えさせられた人びとは，自分たちが成人した社会の費用負担の大変さを心配し，しかもその大変さが，ひとえに高齢化によって生じるものであると信じ込むことになる。ここでは，この連想の間違いを指摘しておこう。

（中略）

実は，扶養負担を表す指標―所得というパイを何人で生産し，そこで生産されたパイを何人に分配するのかを表す指標―として，最も適切なものは，就業者１人当たりの人口（もしくはこの逆数の人口１人当たり就業者数）であるということは，「論理的，学問的にはすでに決着がついている」と言われている[(3)]。

このように，研究室での会話が論文の元となり（「中高校生の時に，こうしたことを覚えさせられた人びとは，自分たちが成人した社会の費用負担の大変さを心配し…」というのは，筆者のことだと思われます），しかも，「世間の常識」をひっくり返すような内容になっていることに，筆者は大変驚きました。「経済学を勉強すると，人々が『常識』と思っているようなことをひっくり返すことを書けるようになるのか…」と思ったものでした。さらに，研究において問題設定がいかに重要であるかということも学びました。

なお，この論文の刊行から 16 年経って，筆者自身がこうした「少子高齢社会危機論」への疑問について書き，それが『エコノミスト』に掲載されました。論旨は権丈（2000a）に沿ったものなのですが，データをアップデートしています。多少長くなりますが，紹介します。

（前略）

財政危機を強調する際に持ち出されるのは，こうした議論（財政赤字の対 GDP 比：筆者注）だけではない。

その際に持ち出されるのが「肩車型」社会論である。それは，2050 年には国民の４割が高齢者となり，1.2 人の現役世代が高齢者１人を支える社会が到来するというものである。1965 年に日本は高齢者１人を 9.1 人で支える「胴上げ型」社会であったが，2012 年には 2.4 人で支える「騎馬戦型」社会になり，2050 年には「肩車型」社会になるというのである。

財務省が先ごろ発表した中高生向けの教材の中にもこうした説明が示されており，「少子高齢化が進むと，高齢者を支える働き世代の１人当たりの負担が増加していきます」と

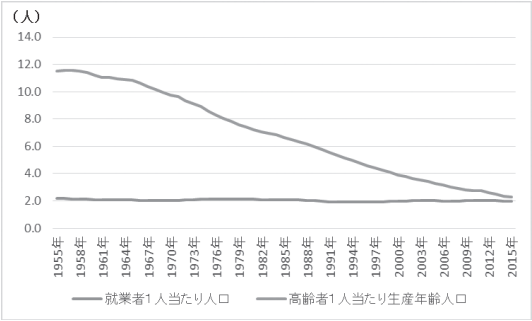
書かれている。高齢者を支える男性が苦悶の表情を浮かべており，視覚的にも訴えかけるものがある。

読者の中にも，現役世代が高齢者を下から支えるイラストを教科書や新聞で見たことのある人がいるのではないだろうか。筆者も中高生の頃にこうした図を見て，「大変な時代がやって来る」と思ったものである。きっと今の中高生も教科書や資料を見て，危機感を覚えるであろう。

では，社会の扶養負担を表す指標として65歳未満人口を65歳以上人口で割った値を用いるのは正しいのであろうか。こうした議論に関しては，就業者数１人当たりの人口を扶養の負担として用いるのが適切であるということが，実は「論理的，学問的にはすでに決着がついている」（川上（1994），権丈(2001)）。

図は日本の人口を就業者数で割った就業者１人当たり人口を1955年から2015年まで示したものである。あわせて「肩車型」社会論で用いられる高齢者１人当たりの生産年齢人口の数字も示している。

図３　就業者１人当たり人口と高齢者１人当たり生産年齢人口



出所　「労働力調査結果」および「人口推計」（総務省統計局）より作成。

この図から読み取ることができるように，就業者１人当たり人口は約２で60年間も安定的に推移してきた。つまり，１人の就業者が自分ともう１人を支えてきたということになる。

これに対して，高齢者１人当たりの生産年齢人口は，1955年に11.5人であったものが1990年には5.6人となっている。ところが，90年代には扶養の負担が高度経済成長期に比べてかなり重くなったなどということはなかった。要するに，高齢化が進展し，人口構成が変わっても，社会の扶養負担はほとんど変わっていないのである。

皆さんは「大学での学びは高校までとは違う」などという話を大学生になってから見たり聞いたりすることがあるのではないかと思いますが，教科書に書いてあることも疑ってみるということも大学生に求められることだろうと思います。そして，そうした姿勢や能力を身につけるのに最適なのが経済分析メジャーであると筆者は考えています。

５　「依存効果」とクリスマス

さて，ゼミに入って経済学を学んでいくうちに，経済学には様々な「流派」があることを知りました。そして，筆者のゼミの先生は，分析にミクロ経済学を用いているものの，「制度派」と呼ばれる経済学の「流派」のアプローチも重視されていることがわかってきました[(4)]。

制度派とは制度の分析を重視する経済学の「流派」で，その経済学の流れに属する経済学者にJ.K.ガルブレイスという人がいます。この経済学者の考え方が面白くて，彼の書いたものを読んでいくうちに，ますます筆者は経済学が面白くなっていきました。彼の考えの中で興味深いのが「依存効果」という概念です。これは「生産者の宣伝，広告によって消費者の欲望が喚起される」という考え方で，筆者のゼミの先生は，この「依存効果」に関するガルブレイスの記述を引用しながら，医療における需要について論じておられました。

この論文自体，非常に面白いのですが，これを読んで筆者は，「この依存効果という考え方で，（当時の）僕を苦しめるアレを批判することがで

きるんじゃないか？」と思い，自分のホームページに次の文章を載せました[5]。権丈（2000b）を下敷きに，４年生であった筆者がある種の「ネタ」として書いたもので，今読み返してみると非常に恥ずかしい内容です。しかし，経済学の分析対象が非常に幅の広いものであり，学部の学生が楽しみながら経済学を応用していたことを皆さんに知ってもらうために，少し長いですが紹介します。

欲望が作り出されるということについて，すでにガルブレイスが「依存効果」という用語を用いて分析している。この分析は面白いほど「クリスマス狂騒曲」の分析に応用できるのである。それを紹介しよう。

「社会がゆたかになるにつれて，欲望を満足させる過程が同時に欲望を作り出していく程度が次第に大きくなる。これが受動的におこなわれることもある。すなわち，生産の増大に対応する消費の増大は，示唆や見栄を通じて欲望を作り出すように作用する。高い水準が達成されるとともに期待も大きくなる。あるいはまた，生産者が積極的に，宣伝や販売術によって欲望を作り出そうとすることもある。このようにして欲望は生産に依存するようになる。専門的な用語で表現すれば，全般的な生産水準が低い場合よりも高い場合の方が福祉はより大きい，という仮定はもはや妥当しない。どちらの場合でも同じなのかもしれない。高水準の生産は，欲望造出の水準が高く，欲望充足の程度が高いというだけのことである。欲望は欲望を満足させる過程に依存するということについて今後もふれる機会があると思うので，それを依存効果（Dependence Effect）と呼ぶのが便利であろう[6]。」

つまり，我々は企業によって操られるマスコミの情報によって，それまで存在しなかった欲望が作り出されているのである。ここから，「クリスマス狂騒曲」は作り出された欲望の上に成り立っていることがわかる。

また，冒頭の「社会がゆたかになるにつれて…」という部分は，日本の 80 年代後半から 90 年代前半に生じたバブルの頃から「クリスマス狂騒曲」が生じるようになったという事実と符合する。

そして，ガルブレイスは続ける。

「財貨に対する関心は消費者の自発的な必要から起こるのではなく，むしろ依存効果によって生産過程自体から生まれる。生産を増加させるためには欲望を有効にあやつらなければならない。さもなければ生産の増加は起こらないであろう。すべての財貨についてこういえるわけでないが，大部分の財貨についてそういえるということで十分である。このことから考えると，このような財貨に対する需要は，あやつらなければ存在しないのだから，それ自体の重要性または効用はゼロである。この生産を限界生産物と考えれば，現在の総生産の限界効用は，宣伝と販売術がなければ，ゼロである。生産こそわれわれの中心的な業績とみなす態度や価値観というものは，まさにひどく歪曲された根の上に立っているといわなければならない[7]。」

つまり，作り出された欲望の重要性というものはゼロなのである。ここから，クリスチャンでない者にとってのクリスマスの重要性はゼロであることが言える。

依存効果によって生まれた欲望はクリスマスプレゼントやディナーのような財貨だけにとどまらない。クリスマスを共に過ごすための人を求めるという行動も，依存効果によって生じた欲望から派生したものなのである。つまり，クリスマスを共に過ごす人を求めるという行動すら生産過程から生じたものなのである。

我々に求められることは，価値のない作り出された欲望に踊らされることなく，粛々と

12月24日を過ごすことなのである。

この文章では，今風に言えば，「リア充」な人々がクリスマスで楽しんでいるのも生産過程によって引き起こされた需要に基づくものであり，「無価値」なものなのだということを論じています。クリスマスに楽しいことがなくても，何ら問題ないということを「科学的」に正当化するものであり，当時の筆者を大いに勇気づけました。

この「依存効果」は，他のイベントにも適用可能です。たとえば，最近盛り上がっている日本的なハロウィンなどもそうであると考えられます。このように，経済学には様々な「流派」があり，皆さんにとってかなり身近な問題についても分析可能です。

6　背後にあるメカニズムを解き明かす

ここまで見てきたように，経済学にまったく興味のなかった筆者は，「合理的無知」という経済学の応用から経済学に興味を持ち，ゼミで勉強する中で経済学や研究の面白さを感じるようになりました。学部選択を間違えたと思った1年生の頃が嘘だったかのように，経済学の応用に面白みを覚え，その後，地方財政の領域で研究を行っていくことになりました。

経済学を学んでみて面白いなと思うのは，経済学が現象の背後にあるメカニズムを解き明かそうとするところです。本稿では「合理的無知」や「依存効果」という考え方を紹介しましたが，こうした概念によって，ある現象が何ゆえに生じたのかということを明らかにしています。「なぜそうなるのか？」ということに一定の答えを示してくれるところが経済学のよいところだと思います。

先に述べたように，経済学には様々な「流派」がありますので，皆さんが興味を持てるものが必ずあるはずです。経済分析メジャーにはたくさんの教員が在籍していますので，そうしたものを選び取ることができる可能性が高いメジャーであると思っています。人生を変える「先生」との出会いによって，経済学の面白さに気づくこともあるかもしれません。ぜひ経済分析メジャーでよい「先生」と出会い，経済学を学んでいってください。

本稿は論文という位置づけではなく，経済学部の皆さんへのメジャー紹介文ということでしたので，筆者の個人的経験を自由に書かせてもらいました。学生と経済学との一つの「出会い方」として頭の片隅に置いておいてもらえればと思います。

《注》

（1）権丈（2001), p.32.
（2）この「先生」は，筆者の学部時代の指導教員であった権丈善一先生で，今や社会保障研究の第一人者でいらっしゃいます。
（3）川上（1994), p.24.
（4）「流派」という言い方は，権丈（2018）に依拠しています。
（5）筆者が所属していたゼミでは，ゼミ員はホームページを必ず持たなければならないということになっており，そこで日記やレポートを公開していました。2000年代のはじめのことです。今風に言えば，ブログみたいなものでしょうか。
（6）Galbraith〔邦訳（1985), p.211.〕
（7）Galbraith〔邦訳（1985), p.213.〕

参考文献

川上則道（1994）『高齢化社会はこうすれば支えられる』あけび書房
権丈善一（2000a）「社会保障研究の問題設定と少子・高齢化」『三田商学研究』vol.43 (1), pp.75-106.
――――（2000b）「制度派経済学としての医療経済学」『三田商学研究』vol.43 (4), pp.33-59.
――――（2001）『再分配政策の政治経済学』慶應義塾大学出版会
――――（2018）『ちょっと気になる政策思想　社会保障と関わる経済学の系譜』勁草書房
J.K. ガルブレイス／鈴木哲太郎訳（1985）『ゆたかな社会　第4版』岩波書店
宮崎雅人（2016）「『財政危機』が分断をもたらす」『エコノミスト』2016年5月31日号, pp.50-51.